

サーキット・ライダー２００２年７、８月号

名も無き留学生達へ捧ぐ：樋口武兄の思い出

わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。私達が裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです。

コリントの信徒への手紙一 １０：１６－１７。

５月末にニューヨークの日米合同教会時代の友人が亡くなりました。彼の名は樋口武。まだ４７歳の若さでした。今回は彼の思い出を書き綴り魂の平安を祈りたいと思います。

武兄と初めて出会ったのは１９８１年の初めでした。私が日米合同教会に連なっていた頃、同教会員で日曜学校の先生をしていた西房子姉がニューヨーク大学の病院に樋口武なる若い日本人がいるので見舞って欲しいと樋口兄の知人から連絡を受け、他の教会員を誘って、彼を訪問し、私も青年会の仲間と訪問いたしました。武兄は私より３つ年上で、７８年にニューヨークに英語留学し事故に遭う直前まで英語学校に通っていました。冬休みに彼は仲間とスキーに出かけ、スキー場に行く途中、狭い道で対向車を避ける時、道が凍っていた為スリップし事故になったと彼から幾度か聞きました。他に３名同乗していましたが、それぞれ皆、奇跡的に軽傷ですみ、助手席にいた彼だけが、首を骨折、頸椎裂傷で、肩から下が全く動かなくなるという悲劇に見舞われました。

病院で出会った彼は首を固定され、体が動かず、完全看護の体制で治療を受けていましたが「現在の医学では頸椎裂傷を治す術がない」と医者から宣告され、まさに絶望の中にいました。しかし、良い意味で日本人男性の気骨を残していた彼は、人前で泣くこともなく、気丈に自分の置かれた状況を見つめ、訪問した私達にも冷静に應對していました。しかし、それまで全く当たり前のように動き回っていた自由が奪われたと言う事実はいかに過酷なものだったでしょう。時折、彼が見せる諦めとも悲しみとも取れる顔の表情に当事者以外分らない痛み、絶望を見たのは私だけではなかったでしょう。

初めて訪問して以来、教会員、特に彼と同年代の青年会、中でも日本から留学していた私を含む一部のメンバーは毎週必ず、時に週に２、３回も彼を訪問しては、聖書の言葉、イエスの教え、教会での出来事、留学の諸々の問題、そしてアメリカ生活一般、また恋愛などについても話をしました。次第に彼も心を許してくれてか、彼の留学前のこと——付き合っていた彼女がいたこと、事情で親元から離れ叔父さん夫婦のお宅にお世話になっていた事、妹さんが結婚するので自分などとは縁を切ったほうが良いと思っている——等を淋しげに話してくれました。ある日、彼に「恋人に連絡しなくていいの？」と尋ねたことがありましたが「連絡しないで」と言われました。「泣く彼女を後に勝手にアメリカに来たのは自分だし、今の僕にはもう何もできないから、、、」とのこと。断腸の思いで、恋心をたった武兄の思いは今でも振り返ると涙がでます。

ニューヨーク大学病院で数ヶ月入院治療を受け、入院中に口で操作する車椅子に乗り、しばし自由に出歩くことを許された後、ニューヨーク・イースト・リバーの中洲、ルーズベルト・アイランドのベルビュー病院に移りました。治療ははかどらないものの、ここではセラピーを受け、わずかに自由になる肩の力で腕全体を動かし、手で動かす車椅子に乗れるようになり、ベルビューでも病室だけでなく、病棟や外へも自由に行くまでになりました。ルーズベルト・アイランドから対岸に眺めるマンハッタンの夕景、夜景の美しさは正にこれぞニューヨークという感があり、彼と幾度か一緒に見たものです。

初めてであってから１年半以上経過した頃、青年会や教会のメンバーの勧めもあり、武兄はとうとうイエス様を救い主として受け入れ、洗礼を受ける決心をしました。その時の喜びは格別なものでした。彼を罪人呼ばわりするのも気がひけますが、正に「一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある」（ルカ １５：１０）というような体験でした。受洗した彼は喜びに満ち、順調にクリスチャン・ライフを送っているように見えてましたが、その幸福な時は儚く過ぎ去ってしまいました。熱心に通っていた教会員も彼が救われて安心したのか、次第に見舞う者が減っていき、私も「やれ期末試験だ」、「やれ論文だ」、「教会行事だ、、、」と、定期的には訪問していましたが、それまでほどは足しげく通わなくなりました。彼もクリスチャンになって暫くの間は靈的に高揚していましたが、体の自由は二度と戻ってこないという現実が再度彼の心に重く押し掛かるようになりしました。またこの教会でも大なり小なり信徒同士や牧師と

信徒の間で食い違いがあるものですが、武兄の耳にもそれが聞こえるところとなり、彼もそんな教会に嫌気がさしていきました。

その頃、ニューヨーク州、連邦政府を相手取って起こしていた、事故の補償に関する裁判の判決が下り、彼は国と州から補償金、援助を受けられることになり、ニュージャージーのアトランティック・シティー近郊の障害者達が独立した形で生活できる施設(家?)に移り住む事になりました。彼がそちらに移ってから、一度ヤングアダルトのメンバーと彼を訪問したのが最後となり、その後どちらからともなく連絡が途絶えてしまいました。

それから10数年の月日が流れました。ここ数年、私は武兄の事が思い出され、気になり、彼が最初に引っ越した頃の電話番号にかけてみたり、手紙を出してみたりしましたが、連絡がつきませんでした。昨年、合同教会の知人数人に彼の消息、連絡先などを尋ねましたが、分からず半ば諦めていました。ですから今回、合同教会のブラウネル牧師より武兄が亡くなったとの知らせを受け、非常に残念で悲しい思いをいたしました。が、同時に彼がアトランティック・シティー近郊に移ってから亡くなるまで10年近く、フィラデルフィア日本人教会の家庭集会に参加していた旨を聞き、実に嬉しく思いました。それは「武兄がイエス様に見守られていた。彼がその後、紆余曲折しながらも教会に連なっていた。」ということを知ったことから与えられた深い喜び、震撼です。

希望に燃えてアメリカに来た武兄でしたが、その後思いもよらない運命が待ちうけていました。私は以前、留学半ばにして志しを果せず亡くなっていった古(いにしえ)の留学生、苦学生の話聞いたことがありますが、その思いは如何なるものだったのか、と想像します。ある人達はきっと辛かったでしょう。また、悲しかったでしょう。しかしある人達はきっと人々の優しさに触れ、神の愛に包まれ、異国の地でその生涯を悔いなく閉じたのではと思います。

私達、クリスチャンはイエスを信ずる信仰において一つです。たとえどこにいても、離れ離れでも。そしてやがて御国でまた逢える。そのことを覚え、既に召された人達には魂の平安を、この世で生きる私達には神の導きがありますようにと心から祈りたいと思います。

吉松 純